１４４「エゾニュウ」

２０２３年７月、４泊５日で北海道を旅した。
これまでも北海道には数回行き、北は稚内・礼文島，南は襟裳岬など、道北，道東，道央，道南の主なところはほぼ回った。ただ、焼尻島・天売島行へは、天候の関係で船が欠航し未だ実現していない。
残っているのは「北 東」地域、枝幸や紋別などオホーツク海沿岸で、今回はその地域を目指した。私にとって久しぶり、コロナ明け後の旅行である。
新千歳空港からレンタカーで、稚内の少し南に位置する猿払（さるふつ）村に直行。宗谷岬からオホーツク海に沿って南下する。浜頓別，枝幸，雄武（おうむ），興部（おこっぺ），紋別からサロマ湖，能取湖を経由して網走。その後、摩周湖の東側を通り抜け東進し根室，最東端のノサップ岬へ。太平洋側に出て霧多布岬、そこから再び内陸部のオンネトー，然別湖，糠平湖，音更町，占冠村（赤岩青巌峡）を経由し新千歳空港まで１，６００ｋｍを超える距離を走った。

宗谷岬からオホーツク海に沿って南下する国道２３８号の両側に、延々と続く背の高い変わった形の植物が強く印象に残った。途中で車を止めて良く観察すると、とても奇怪な形で、無数に群生する様子は、荒漠とした北海道北部の典型的な景色の一つと言えるかもしれない。
高さは人の身長を優に超え、細長く伸びた茎の上部が枝分かれし、その先が更に細かく分かれて夥しい数の蕾が付いている。その下の葉（苞：ほう）は褐色で、割れて垂れ下がり少し不気味な感じである。大きさといい、形といいなかなかユニークで存在感のある植物だ。
北海道や東北の沿岸部や山地の草地に分布するが、これまでの北海道旅行では気付かなかった。
最初、何という名の植物か分からなかったが、“エゾニュウ”と分かった。「蝦夷ニュウ」と書き、「蝦夷」は北海道の旧名だから北海道に多く生息する植物とわかる。「ニュウ」はアイヌ語に由来し、食用・薬用になる植物を指す言葉。漢字では「蝦夷丹生」と書くようだが、“丹生”は多分当て字だろう。

宗谷岬～猿払村間で撮影したエゾニュウ

エゾニュウは茎の一部が食用となるが、非常にアクが強いという。私としては、毒性のある熱帯性植物のようで、最初は触れるのもはばかられるほど、とても食用にしようという気は起らない。

今回見た範囲で、このエゾニュウは、宗谷岬から国道２３８号沿いに興部あたりまで延々と群生し、紋別を過ぎると疎らになった。網走から根室の間は海岸線を走らなかったので不明だが、根室からノサップ岬に近づくとまた現れた。また、ノサップ岬では、エゾニュウに似た「エゾノシシウド」という植物の群生も見られた。

ノサップ岬で見つけたエゾニュウに似たエゾノシシウド

エゾニュウ愛好者が「蝦夷丹生倶楽部」を発足させた、という記事が２０１９年６月北海道新聞に掲載された。新聞タイトルに『「エゾニュウ」不思議な魅力発信』とあり、立ち上げたのは他県から道北へ移り住んだ女性である。曰く“初めて見た時はビックリ、他に似た植物が少なくて生命力にあふれている。撮影するために一眼レフカメラを買ったほど。”

同クラブでは、エゾニュウを使った料理レシピや迫力のある画像を中心に発信している。

やはり初めて目にした人にとって“エゾニュウ”は珍しく、私と同じように好奇心を持つ人は多いのではないだろうか？（２０２３．０７．１６）